

3章 地域クラブ事例調査

1. 調査概要

1. 1 調査目的

2章のグループインタビューでは、母親たちが家族やチーム、チームを取り巻く環境に支えられている様子が浮かび上がった。3章では実際のクラブでのインタビューを通して、母親とチーム(指導者や運営スタッフ)の関係性や、母親を支える環境について、具体的な事例をもとに明らかにしていきたい。

1. 2 調査方法・対象

2つのクラブにおいて、母親に対するグループインタビューを実施した。インタビュー対象者は、各クラブの事情にあわせて指導者から依頼をもらった。インタビューは各クラブの活動場所付近の会場で行った。あわせて活動風景の見学、指導者へのヒアリングも行っている。

1. 3 調査時期

2017年9月

1. 4 調査内容

現在行っているスポーツ活動・始めた経緯／検討時点での親の関与イメージ／子供の活動状況と親の関与実態／親のやりがい・負担感 など

その他、各クラブの事情にあわせて、特徴的な取り組みについては深く掘り下げて聞くようにしている。

1. 5 本章を読む上での注意点

インタビュー時の発言は基本的にそのまま記載している。筆者による補足は「()」で、テキストの省略は「…」で表記している。

2. 調査結果

FCゴール

1. クラブ概要

| | |
|------------|--|
| ① 所在地 | 神奈川県横浜市 |
| ② スタッフ数 | 6人(うち専任2人) |
| ③ 会員数(小学生) | 約50人 |
| ④ 活動内容 | 主たる活動は子供のサッカー。幼児と小中学生(U8,U10,U12,U15)のクラスがある(小学生の活動の詳細は以下⑤～⑨を参照)。その他「からだづくり運動教室」として各種教室を開催。また、学習補助の一環として「チャレン塾」を開催 |
| ⑤ 活動日、時間 | 毎週月曜・木曜・金曜・土曜・日曜。1回あたりの活動時間は1時間半 |
| ⑥ 活動場所 | 地元の小学校・中学校 |
| ⑦ 試合等 | 主には春、夏、秋、年明けに、各種試合に参加 |
| ⑧ 合宿 | 年に2～3回。長期休暇中に実施 |
| ⑨ その他の活動 | 新年には「初蹴り」を実施。OBや保護者も多数参加するイベント |

注)⑤～⑨は小学生のサッカー(U8～U12)に関する。

2. 活動風景

最寄りの駅から徒歩5分ほどの距離にあるビル内に、FCゴールのクラブハウスがある。活動場所からも近く、普段から会員の子供たちの居場所となったり、練習中に保護者が談笑したりしている。未就学児が遊ぶことのできるおもちゃもあり、会員の弟妹を連れて移動する保護者も過ごしやすい場となっている。

活動場所として、近隣の学校の施設(グラウンド・体育館)を使用している。見学した日は平日の夕方、夜間照明で煌々と照らされたグラウンドで、26人の子供たちが活発にサッカーの練習をしていた。学年別(U8,U10,U12)に3グループに分かれ、各グループ1人のコーチが指導している。練習は90分を3ブロックにわけて行う。最初はコーディネーショントレーニング、次に各コーチが課題だと思ふスキルの向上を目的とした練習、最後にゲーム形式の練習を実施する。



写真1 サッカー(U10、U12)の活動風景

練習終了後は、身につけていたビブスを指導者に返却し、低学年の子供たちが竹ぼうきでグラウンドの周囲をはき、上の学年の子供たちがトンボでグラウンドを整備する。終了すると、子供たちは迎えに来た保護者とともに帰宅する。練習中、最初から最後まで付き添う保護者は少数である。

FC ゴールは総合型地域スポーツクラブとして、サッカー以外にもさまざまな活動を展開している。見学した日には、サッカーと同時間帯に、体育館で「少年少女バレー」が行われていた。コートを2面設け、1面では高校生が男女合わせて15人程度、もう1面では成人女性が6人程度、それぞれバレーボールのゲームを行っていた。もともとは、保護者の間から「子供たちが活動している間に、自分たちも何かスポーツをしたい」という声があがり、始まったという。そのうち、バレーボール部がない高校に進学したクラブのOB・OG やその知人も加わり、現在のような形で活動するようになった。コート上ではにぎやかな声が飛び交い、自分たちのペースで楽しくバレーボールを続けている様子であった。



写真2 練習後のグラウンド整備を行う子供たち



写真3 「少年少女バレー」の活動風景

3. 保護者インタビュー

3-1. 概要

対象となったのは第1子が小学生の母親計4人で、2017年9月中旬に一度面会し、下旬に正式なインタビューを実施した。クラブでの保護者の関係性や指導者の関わり方について、時に具体的な親子のエピソードを交えながらお話しいただいた。子供2人も同席して、終始にぎやかな雰囲気で行われた。

FC ゴールの会員は、近隣の複数の小学校の児童から構成されている。また、繁華街がすぐ近くにあり、夕方から夜間に働く母親も少なくない。最近では外国籍の住民も急増し、子供が入会するケースも増えている。多様な家庭環境・生活スタイルを背景にしたクラブである。

そうしたなか、インタビュー対象の母親たちには、指導者も含めて冗談を言いあえるような関係性がみられた。

3-2. 保護者の役割

クラブが保護者に求めている役割は、自分の子供の「夜間練習時の送迎」「試合時の送迎」のみである。保護者の係や当番はない。指導者によると「当番にしないで、できないことは互いに助けあう」方針だという。そして保護者に役割を求めない分、指導者たちが練習時に使用するビブスの洗濯やイベント時の調理なども担当している。母親たちは入会時を振り返り、指導者から「練習から何からもう、こちらで全部見ますので、親御さんから口出しするようなことはやめてください。子供が混乱しちゃうから」と言われた旨を語っている。

ただし、実際には家庭の都合で子供の送迎ができない場合もある。そのような場合に関しては「子供は行けるのに(という状況)だったら、(保護者どうしで)声かけあって連れていってあげる」という。また、そのようにして他の子供も連れていく保護者に対しては、指導者が「ちゃんと、『お願いします』みたいな」声かけをしている。

また、指導者が引率をする試合もあり、練習試合の場所によっては、「コーチが『(保護者が)行けなかったら声かけてください』って言うってくれる」ときもあるという。地元の祭りにも指導者と子供たちだけで参加し、保護者の手伝いは必要ない。

親どうしでは、「特別に何か集まって(すること)はない」学年も多いと言う。しかし、「お母さんたちも仲がいい」関係性で、6年生の卒業時には有志で下の学年からプレゼントをする慣習がある。

3-3. クラブの特徴

ここまで保護者の役割が少ない地域クラブは、珍しい事例かもしれない。ただ保護者の負担が少ないだけではなく、クラブに対して信頼を寄せ、自然と保護者どうしが盛り上がる空気ができるには、クラブの指導方針等の特徴も影響している。

(1) 活動方針・指導方針

母親たちのインタビューでは、「いい意味のゆるさ」という言葉が聞かれた。「ゆるい」という単語そのものは決してプラスイメージにはならないが、どのような点が「いい意味」なのだろうか。インタビューからは、いくつか「いい意味のゆるさ」を形成する要素が見つかる。

第1に、クラブの活動内容・形態である。活動日は、平日3日と土曜・日曜をあわせて週5日である。しかし会員はすべての曜日に参加する必要はない。「学校のクラブ活動が遅くなった日は休む」といった調整も可能である。子供たちは参加できる曜日だけ来ればよく、インタビューした4家庭でも、週2~5回までさまざまであった。

一方で、「試合の経験を積む」という方針で、試合・練習試合の回数は確保している。特徴的なのは、レギュラーと補欠の区別がない点である。途中交代も含め、全員が出場できるようにしている。指導者によると、試合のメンバーは子供たちに決めさせていて、じゃんけんで決まることもあるという。母親によると、「まれに『勝てる!』ってときは、そのまま」のメンバーで続行する試合もあるようだが、語り口からはその「まれ」な状況も親子で楽しんでいる様子が見えがえた。

第2に、指導方針である。指導者の様子については母親たちから口々に語られたが、いくつか特徴的な点を記述したい。まず、感情に任せて怒鳴ったりすることがないという。母親たちは「コーチの気分で子供たちと接してるというのは、今まで見たことない」「(試合中に子供たちが)何しても穏やかでいられるコーチがすごい」と語る。また、運動能力やスキルの高さなどで子供たちを序列化するのではなく、「子供たちの発育発達を第一に考え」「社会性を学ぶ」(以上、クラブのチラシより引用)ことを意識した指導が行われており、母親もその点に大きな信頼を置いている。インタビューでは、「一人ひとり、どういう性格の子なのかっていうのをよく見ている」「(試合に)『ただただ、うまいから出す』わけじゃなくて、日常生活を送っているなかで、何かいけないことをすればペナルティ(=試合に出られない可能性)がある」「ダメなことはダメだし、いいことしたら褒めてくれる」「合宿で(周囲に迷惑をかけない)シャワーの浴び方とか(教えてくれた)」等の発言が聞かれた。

母親たちは入会時を振り返り、自身の子供について「人の輪に入れなかった」「人見知りがすごくて、親離れできない状況が続いて」など、競技力よりは発達・社会性の部分で子供の課題を感じていた旨を語っている。クラブの活動内容や指導方針は、そうしたニーズに応えることができている。また親子に強制がなく、ゆるやかにつながっていることが、かえって互いの信頼や仲のよさを支えている。母親が口にする「いい意味のゆるさ」とは、競技力だけに特化しないクラブの指導方針や、困ったときに助けあえる会員間のゆるやかなつながりの上に成り立っていることがわかる。

(2) 後進の育成

クラブの指導者は、50代のコーチ兼クラブマネージャーと、20代のコーチ5名である。20代の指導者たちは、皆クラブのOBまたは出身者で、かつては現クラブマネージャーから指導を受けた身でもある。(1)で記述したクラブの指導方針は、「クラブマネージャーだけじゃなくて、若い他のコーチの皆さんも」継承し、クラブ全体を支えるものとなっている。

若い指導者とともに活動場所付近を歩くと、短時間にもかかわらず、クラブのOB・OGを含む多くの子供たちから声をかけられていて、子供たちから親しまれ、信頼を得ている様子がうかがえた。そうした指導者の姿は、現会員の子供たちの憧れにもなっていて、母親からは「(子供が)ここで働きたいって言った」というエピソードも聞かれた。後進の育成が未来のためだけではなく、現会員の親子の信頼にもつながっている様子が浮かび上がる。

新町 SVC スポーツ少年団

1. クラブ概要

| | |
|------------|--|
| ① 所在地 | 群馬県高崎市 |
| ② スタッフ数 | 指導者 1 人、ほか中学生～大学生のユースボランティアが活動を補助。 |
| ③ 会員数(小学生) | 65 人(小学生 37 人) |
| ④ 活動内容 | 走り方、ドッジボール、スキー等のさまざまなスポーツを実施。低学年はバランス力を身につけるさまざまな種目の体験、高学年は自分たちが考えた種目が中心。 |
| ⑤ 活動日、時間 | 毎週日曜日。1 回あたりの活動時間は 2 時間。 |
| ⑥ 活動場所 | 地元の小学校 |
| ⑦ 試合等 | 特になし |
| ⑧ 合宿 | 年に 1 回、秋に 1 泊 2 日で実施。 |
| ⑨ その他の活動 | バーベキュー大会、スキー合宿、体力チャレンジ&クリスマス会、ドイツや沖縄のスポーツ少年団との交流事業等、さまざまな事業を実施。ジュニア・リーダー、シニア・リーダーの養成にも力を入れている。 |

2. 活動風景

新町SVCスポーツ少年団は、群馬県高崎市新町で活動するスポーツ少年団である。新町は 2006 年に隣接しない高崎市と合併して飛び地になっている地域で、町内には 2 つの小学校と 1 つの中学校がある。子育て世帯は夫婦のいずれかが新町出身のケースが多く、母親によると「他の地域に比べて、お母さんが新町(出身)というのがすごく多い」のだという。

そのような地域で、少年団は約 50 年の歴史を持ち、親子 2 代にわたる団員も徐々に増え始めている。1997 年には、少年団を核とした地域総合型スポーツクラブ「新町スポーツクラブ」が設立され、団員には少年団以外の教室にも通う子がみられる。活動場所は最寄り駅から車で 5 分ほどの小学校である。中学校が隣接し、周囲は住宅街で、徒歩圏内には上武大学のキャンパスが立地する。

見学した日は雨天のため、体育館で活動が行われた。活動時間が近づくと、車や徒歩で次々に親子がやってくる。少年団で作っているおそろいの T シャツを着た子供もみられる。この日は小学 1 年生から 6 年生まで約 15 人の団員が集合すると、指導者から話があったのち、前半の 1 時間はコーディネーショントレーニングをベースにした動きづくりや走力強化のプログラムで汗を流した。

後半の 1 時間は、子供の主体性や協調性を育むため、子供たちがやりたいスポーツや運動遊びを話しあい決めて行う時間にあてられた。この日は議論の結果、鬼ごっこや「だるまさんが転んだ」などを全員で行った。このように、少年団の「スポーツ嫌いの子供たちを歓迎する」「地域社会で必要とされる青少年を育成する」というコンセプト



写真 4 前半の活動風景

が反映された活動内容で、1つの競技に特化するというよりは、楽しく体を動かす活動やリーダーの育成に重きを置いている。

この日は中高生のリーダーが7人参加し、小学生たちと活動を楽しみながら、指導の補助も行ってた。また、「当番」として2人の父親も参加していた。



写真 5 高校生(シニアリーダー)の体験談を聞く子供たち

3. 保護者インタビュー

3-1. 概要

インタビューは2017年9月下旬に、母親6人に対して実施した。子供の年齢は小学生から社会人まで幅広く、以前から現在までの保護者の関わり方や課題について、多様なエピソードを交えたお話をうかがうことができた。

新町 SVC スポーツ少年団の小学生団員は、ほとんどが活動場所となる新町第一小学校に通う子供たちである。インタビューには他の小学校から通う子供の母親も参加してくれたが、「第一小でやっている活動には(他の小学校からは)行っちゃいけないみたいに思っている人も」いる旨を語っていた。少年団としては「どこに住んでいる人も」歓迎していて、現在は新町以外の地域から通う団員もいるが、基本は1つの小学校区に根付いてきた少年団といえる。

そうした地域で長年、母親を中心とした保護者が役員や係を分担して、少年団の運営を支えてきた。インタビュー対象となった母親には、子供の頃から現在まで新町に住み続けている母親、職場や出身中学が同じ母親どうしもみられた。

3-2. 母親たちの役割

まずは、保護者の役割を整理する。活動場所は学区の小学校、活動時間も週1回2時間であり、日頃の送迎は必須ではない。学区に住む子供たちは、1人で通うこともできる。保護者組織としては、書記・会計からなる「本部役員」のほか、「スキー係」「合宿係」等の各種イベントの係や、「SVC新聞」を作成する「広報研修部」等が存在し、保護者はいずれかの役員・係を担当する。

「本部役員」はかつて6人体制、近年では4人体制で、「交代で来て、鍵を開けて、救急箱の用意をしたり」、「当日使ったビブスを持って帰って洗濯したり」、「月謝の収支を管理したり」と、日頃の活動を支える重要な役割である。しかし現在は団員数の減少に伴い、「本部役員」の担い手減少という課題に直面している。小学生がいる家庭でも、中高生のきょうだいが部活などで忙しくなると、保護者も「なかなかこっち(少年団)へ来られなく」という。

そこで現在は、「苦肉の策」として役員制から当番制への変更を試み、中学生の保護者が通常時の活動を補助している。当番は「1年に何回かまわってくる」ぐらいの頻度だと言う。ある母親は、かつては幼児・小学生の子育てで余裕がなく、「自分が一人になる時間がほしくて」子供を入団させていたと語るものの、現在は子供が大きくなったことで「気持ち的にも余裕ができて、当番(に)行っても大丈夫かなって感じ

に変わりつつある」と支える側にまわっている。子供の人数が減少しても、新町には保護者どうしが「声をかければ、協力してくれる」関係性があるという。

また母親たちは、周囲から少年団は「保護者が大変っていうイメージ」でみられていて、入団の勧誘をしても、保護者が当番を理由に断るケースもあると語る。ただし、実際の団員の母親たちの間ではそれほど負担感はなく、「やってみたらたいしたことはない」「いろいろ情報交換できたりなんかして、楽しく過ごせてよかった」という声が多い。指導者も「できる人ができない人を助ければいい」という考え方で、保護者が活動に参加しづらい家庭も受け入れている。

3-3. クラブの特徴

このように、少年団は役員の担い手の減少という課題に直面しつつ、母親たちの工夫や支えあいで乗り切ろうとしている。それだけでなく、クラブには指導者以外にもさまざまな人が活動に参加したり支えたりする仕組みがみられる。

(1) 活動方針・指導方針

第2章で母親たちが「やりがい」を見いだすポイントとして「家族の変化」を指摘したが、新町 SVC スポーツ少年団には、その「家族の変化」を起こすしかけが多くみられる。

たとえば少年団が年に1回実施する合宿にあたっては、指導者から保護者に「大変なんだけど、小さいお子さん(を)なるべく連れてきてください」と話しているという。合宿ではウォークラリー、ボールを使った運動、キャンプファイヤー、野外炊事などのプログラムがあるものの、幼児の子供たちは自由に遊ばせている。指導者によると、合宿を始めた当初は、「(家族)皆が一緒に行けなきゃつまらない」という理由で参加させていたが、現在は幼児が参加することで「小学1・2年生もちゃんと面倒をみる努力をする」「小さい子がいてくれたほうが合宿の効果が高い」と考えているという。実際に幼児のきょうだいを連れて参加した母親も、「皆が活動している所にいっぱなしでも、誰かしら一緒にやってくれる(遊んでくれる)」と語っている。また、子供が低学年だった時期を振り返って、「大人が遊んであげているよりも、大きい子がみているっていい、いい環境だなんていうのがあった」と語る母親もいた。

合宿以外にも、スキー教室に幼児のきょうだい・母親・父親も一緒に参加するなど、家族ぐるみでイベントを楽しんでいる家庭は多い。子供たちも種々のイベントは楽しみにしており、「全部」参加していると語る母親は多かった。

実は、新町 SVC スポーツ少年団でも FC ゴール同様に、母親たちの中から肯定的な文脈で「ゆるい」という言葉が聞かれた。かつては保護者の間でも「ガツガツ勝ちに行く」志向が強い時期もあったようだが、大半は少年団での活動を「チームワークを作るのが目的」「自分たちで何かを考えていくというプロセスを学べる」などと考えている。

母親たちの語る「ゆるい」は、勝利至上主義ではない活動方針に加えて、異年齢の子供たち、家族、OB・OG など、多様な人々に関わることで作られる場のあたたかな雰囲気への評価を含んでいるものだろう。

(2)後進の育成

スポーツ少年団には「日本スポーツ少年団リーダー制度」に基づいた、リーダースクールを修了すると付与される「リーダー資格」がある(日本体育協会, online)。新町少年団でも、中高生になった団員のなかにはジュニアリーダー・シニアリーダーの資格を取得し、日常の活動や行事に顔を出している子供たちもいる。さらに大学生や社会人のなかには、指導者資格をもつ OB・OG もいる。彼らは指導者からの「LINEひとつで駆けつけてくれる」関係性で、団の活動をフォローしている。クラブに常時携わる指導者は1人だが、こうした数々のボランティアスタッフが少年団を支えている。

そうした先輩たちの姿から、小学生の団員も自然と団への関わり方を学んでいる。たとえば、「クラブ概要」に記載したイベントには、新町少年団単独で開催するもの、クラブ全体に参加対象を拡大したものが含まれているが、いずれも少年団の中高生・大学生が「中心になって動かす」ので、小学生の団員たちも「先輩たち来ているから、皆一緒に出てくるみたいな感覚」でほぼすべてのイベントに参加するという。

中高生は、ドイツの少年団(スポーツユエгент)との交流事業にも参加している。中高生がドイツに滞在することもあれば、中高生の家庭がホストファミリーとなり、ドイツからの訪問を受け入れることもある。事業の終わりには感動してほとんどの青少年が号泣する。保護者も「役割とかじゃなく、自分が好きでやっている感じ」「親が楽しむ感じ」で受け入れをしている。

このように、少年団ではリーダー育成に力を入れていて、小学生の団員にも活動を支えるイメージが自然とできていく。また、日頃の活動には顔を出せない OB・OG も、成人式当日は多数が晴れ着やスーツ姿で参集し、成人になっても交流が続いている。さらには OB・OG の親にも、協力を惜しまない人たちがいる。地域性だけではなく、こうした少年団の取り組みによって「声をかければ、協力してくれる」体制が築かれている。

3. 結果のまとめ

以上、2つのクラブのインタビュー内容をまとめた。

2つのクラブには、母親たちが肯定的な文脈で語る「ゆるさ」がある。それらは共通して、競技力や勝利だけにこだわらない活動方針、子供の発達や社会性を重視した指導方針や、指導者と保護者の信頼関係によって支えられるクラブの雰囲気を含んでいた。

学校部活動の研究では、「競技の論理」に対する「教育の論理」(友添 2016)、「競争の論理」に対する「居場所の論理」(内田 2017)という言葉が使われている。両者に共通するのは、選手育成や試合の成績ではなく、主体性や社会性の育成・涵養が重視される点である。母親たちが語る、いい意味での「ゆるさ」を支える条件は、「教育の論理」「居場所の論理」に近いのではないだろうか。それが保護者のクラブに対する信頼につながり、保護者役割のないクラブではゆるやかなつながりがうまれ、保護者役割のあるクラブでは母親やOBたちが助け合う土壤がうまれている。

民間のクラブが一定数を占め、市場の論理が働く小学生のスポーツ活動においては、当然「競技の論理」「競争の論理」で活動するクラブも多く、それを否定することはできない。しかし、保護者の生活時間や価値観、家庭の経済状況が多様化するなかで、「ゆるさ」に対するニーズは決して低くはない。保護者が評価する「ゆるさ」があり、参加しやすいクラブの存在は、負担感の強い親のもとでも子供が希望するスポーツができるための環境につながるのではないだろうか。母親たちの声からは、そうしたクラブが地域で果たす役割の大きさと可能性を感じることができた。

なお、本調査では、競技力向上を強く志向するクラブは対象に含んでおらず、得られた知見は一般化できるものではない。その点は今後の研究の課題として指摘しておきたい。